

運動疫学 ニュースレター



平成 30 年 12 月 17 日発行 No.11

第 21 回日本運動疫学会学術総会開催報告

第 21 回学術総会 大会長／早稲田大学 岡 浩一郎

2018 年 6 月 23 日（土）、24 日（日）の両日に、早稲田大学大隈小講堂をメイン会場として、第 21 回日本運動疫学会学術総会が開催されました。

今回は特別講演として University of Calgary の Department of Community Health Sciences の准教授である Gavin McCormack 先生を招待しました。当日は、“(Un)Healthy Neighbourhoods: Built Form Shaping Physical Activity, Weight, and Health” と題して、カナダにおける非常に興味深い研究成果や実践的な取り組みをご紹介いただきました。

教育講演としては、東北大学の中谷友樹先生に「運動の地理疫学と GIS」、大阪大学の平井啓先生は「運動疫学研究に活かす行動経済学」、早稲田大学の柴田重信先生には「時間栄養・時間運動の視点による健康科学」といったテーマでご講演いただきました。

さらに、シンポジウム 1「運動疫学研究の今とこれから」、シンポジウム 2「運動疫学を担う熱き若手の思いーエキスパートの期待を添えてー」では、運動疫学会で活躍するベテラン研究者および若手研究者にシンポジストとして登壇いただき、エネルギーに話

題提供いただきました。参加者の方々とも非常に興味深い議論ができたのではないかと思います。

初日の夜には、早稲田大学大隈ガーデンハウスにおいて毎年恒例の懇親会が開催されました。数多くの方々にご参加いただき、参加者同士の親睦も一層深まったのではないかと思います。

一般演題に関しては、口頭発表が 4 演題、ポスター発表が 14 演題と合計 18 演題の発表がありました。例年通りの発表も質の高いものであり、日本の運動疫学研究者たちのポテンシャルの高さを感じることができました。特にポスター発表は、軽食を摂りながら、リラックスした雰囲気の中で活発な質問や意見交換が行われていたと思います。

来年度の学術総会は、2019 年 6 月 22 日（土）、23 日（日）の二日間にわたり慶應義塾大学で開催されます。来年も、皆様の積極的なご参加、ご発表をお待ちしております。



第 22 回日本運動疫学会学術総会のご案内

第 22 回学術総会 大会長／慶應義塾大学 小熊 祐子

1. 日 時：2019 年 6 月 22 日（土）、23 日（日）
2. 会 場：慶應義塾大学
日吉キャンパス来往舎
住所 神奈川県横浜市港北区日吉 4-1-1
日吉駅（東急東横線、東急目黒線／横浜市営地下鉄グリーンライン）徒歩 1 分
3. 組 織：大会長 小熊祐子（慶應義塾大学スポーツ医学研究センター・大学院健康マネジメント研究科）
事務局長 齋藤義信（慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科）
4. 懇親会：2019 年 6 月 22 日（土）18 時から 20 時 日吉キャンパス協生館ファカルティラウンジ
5. 参加登録開始時期：2019 年 1 月中旬頃（学会ホームページでご案内いたします）
6. 問い合わせ先：齋藤義信
(e-mail: jaee.meeting22@gmail.com)

学術総会のテーマは「繋ぐースポーツ・身体活動と地域・ヘルスケア」としました。不活動者が世界的に多く、減少の傾向を認めない中、



多分野が連携して安全・安心に身体活動をすすめていく必要があります。一人ひとりの能動的なアクションを意識し、“繋ぐ” としました。プログラムの詳細は現在準備中です。皆さんのご参加をお待ちしています。

CONTENTS

1. 第 21 回日本運動疫学会学術総会開催報告 … 1
2. 第 22 回日本運動疫学会学術総会のご案内 … 1
3. 第 19 回運動疫学セミナー報告 … 2
4. 運動疫学セミナーに参加して … 2
5. 第 4 回運動と健康：分野横断型勉強会報告 … 3
6. 第 7 回 International Society for Physical Activity and Health (ISPAH) Congress 参加報告 … 3
7. 私と運動疫学 … 4
8. 編集委員会特集企画 … 4
9. 「日本運動疫学会プロジェクト研究」を募集します … 4

第19回運動疫学セミナー報告

セミナー委員会委員長／東京大学 笹井 浩行

第19回運動疫学セミナーが2018年8月31日（金）～9月2日（日）の2泊3日の日程で、Active Resorts 宮城蔵王（宮城県）で開催されました。今回も例年通り3つのコースを設定し、受講者31名（ベーシック23名、アドバンス7名、フリー1名）と講師9名の総勢40名の参加となりました。

本セミナーでは、いずれのコースも最終日午後の「研究計画の発表」を目指して、受講者がグループ（5～6人）に分かれて計画を立案します。セミナー開始から2日目の夕方まで、受講者は研究計画立案に必要な内容および最近のトピックが含まれた講義を受講し、2日目の夕食後から本格的に計画

立案に臨みます。今回は、研究計画の対象（子ども、高齢者、有患者など）と身体活動・運動を曝露とするか結果とするか、をくじ引きで決める新たな試みを取り入れました。

アドバンス/フリーコースからは記述研究が1題とコホート研究が1題、ベーシックコースからは介入研究が3題、コホート研究が1題発表されました。いずれも苦勞の成果が出ており、どれも興味深いものとなっていました。今回、立案された研究デザインは日本運動疫学会のウェブサイト近く掲載されますので是非ご覧ください。

セミナー委員会では受講者がセミナーで学んだ知識や経験、更にはセミ

ナーで知り合った仲間や講師陣とのネットワークをもとに、これからの研究活動をより推進していただくことを強く望んでおります。また、受講者の協力のもと講義内容やセミナー全体に関する評価のための調査を実施しております。その結果をもとに、更に充実した内容を提供できるよう企画、運営を進めてまいります。

次回のセミナーの日程や場所は未定ですが、例年通り8月下旬に開催予定です。次回セミナーは記念すべき第20回目となり、節目にふさわしい企画も検討しています。詳細は随時、学会ホームページ等でお知らせいたします。



運動疫学セミナーに参加して

福岡リハ整形外科クリニック／福岡大学大学院 出口 直樹

8月31日～9月2日の3日間、運動疫学セミナーのベーシックコースに参加させて頂きました。私は理学療法士として臨床で働きながら、社会人大学院生として疫学研究を実施し今年度、大学院博士課程が修了予定です。運動疫学セミナー（以下、本セミナー）に参加した目的は、博士号取得後から研究者の第一歩であるとの私の考えから、研究作法を再度きちんと学ぶためでした。数あるこの様なセミナーのなかで本セミナーを受講した理由は、本学会の会誌である「運動疫学研究」に論文を投稿した際に、査読が丁寧かつ献身的なコメントで、疫学研究における多くの学びを得ることができたからです。私はベーシックコースに参加

しました。講義は、研究を行ううえで必要不可欠な内容で、講師の先生方のわかりやすい説明により正しい作法を理解することができました。講義を通じて良かったことは、1) これまで実施していた研究作法が誤った作法であったことに気づけたこと、2) 私の疫学研究に対する多くの疑問を解決できたことでした。グループワークにおける研究計画の立案では、多職種のメンバー（医師、健康運動指導士、理学療法士、学部生）での討論において、1) どうすれば身体活動が続けることができるか、2) 研究における実現可能性（サンプルサイズおよび研究費用）に関して議論しました。また、ナイトセミナーでは食事をしながら、講師の先生方や

参加者の皆様と職場環境や研究についてざっくばらんに楽しく会話ができたことがとても思い出に残っております。

本セミナーを通じた学びのなかで、疫学研究の実施にあたり最も重要なことは、“研究に対する真摯さ”だった様に感じました。今回、感じたことを忘れず研究に向き合っていきたいと思えます。貴重な体験に加え、気づきを与えていただいた3日間でした。講師の先生方、共に過ごしてくれた参加者の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。



第4回運動と健康：分野横断型勉強会報告

学術委員会委員長／東北大学 門間 陽樹

平成30年9月6日(木)に「第4回 運動と健康：分野横断型勉強会」がアオッサ(福井県福井市)で開催されました。これまでは「運動疫学の集い」として開催されていましたが、他分野の方々への参加を促すために、今回から「運動と健康：分野横断型勉強会」に名称を変更させていただきました。合計で52名(会員42名、非会員10名)の方に参加していただきました。

今回は、運動疫学研究のみならず、どの分野でも必須のスキルとなる統計解析をテーマに、「統計解析と研究デザインの狭間 - 統計解析に関する素朴な疑問に答えませー」と題して企画を実施しました。まず、学術委員会を代表して私(門間)が研究における統計解析の役割について、疫学と統計学を対比させながら整理し、研究室の日

常から仮説研究を考え、茶碗に盛られたご飯粒から誤差を感じてもらいました。続いて、本集会の目玉企画でもある統計相談会を研究デザイン別に分かれて実施しました。講師として、天笠志保先生(東京医科大学)、安藤大輔先生(山梨大学)、鎌田真光先生(東京大学)、辻大士先生(千葉大学)、松下宗洋先生(東海大学)、山北満哉先生(北里大学)(以上、学術委員の先生方)ならびに、統計解析に精通されている笹井浩行先生(東京大学)、川上諒子先生(早稲田大学)にご協力いただきました。データのクリーニングや欠損値への対処、調整変数の選び方、群の割付方法など、普段(恥ずかしくてなかなか)訊けないような内容が話題の中心となり、良い機会を提供できたのではないかと思います。なお、

講演で発表したスライドのPDFファイルが学会ホームページ上からダウンロードできるようになっておりますので、ぜひご活用ください(スライドをご希望の方は門間まで直接ご連絡ください)。



さらに、終了後には懇親会改め意見交換会を開催し、46名(非会員7名)の方々にご参加いただき、活発に情報交換を行うことができました。

来年度は若い学術委員の先生方が企画立案する予定ですので、ぜひご期待ください。また、学生のみならず積極的な参加を期待しています。

第7回 International Society for Physical Activity and Health (ISPAH) Congress 参加報告

東京都健康長寿医療センター 阿部 巧

2018年10月15日から17日にイギリスのロンドンで開催されたThe 7th International Society for Physical Activity and Health (ISPAH) Congressに参加してきました。ロンドンといえば、John Snow 医師によって疫学の起源であるコレラの研究がおこなわれた地であり、運動疫学の起源とも言える Morris 博士のバス研究がおこなわれた地でもあります。会場の雰囲気も素晴らしく、メイン会場の演台の上にミニカーのバスを置いていたのが印象

的でした(写真①、②)。

この学会は、子どもから高齢者まで全年代を対象とし、介入研究もあれば疫学研究もある、身体活動の効果を報告している研究もあれば、身体活動の評価方法を報告している研究、身体活動に関する政策を報告している研究もある、その名の通り、「身体活動」と「健康」に焦点を当てた学会となっております。

2016年に発行された運動疫学ニュースレター(No.7)の中で、齋藤先生(慶

應義塾大学)も述べられておりますが、この学会は興味深い発表の多さ故に、聞きたい発表の時間が重なることがあります。そのため、以下に述べる印象は私が参加したセッションに偏ったものであることを先にお断りさせていただきます。私は2年前の本学会にも参加しましたが、その時とは少し違った印象を受け、より効果的な身体活動の実践方法を探る報告が多かったように感じました。例えば、いつ身体活動をするか?どこで身体活動をするか?誰と身体活動をするか?どう(どの強度で)身体活動をするか?など、です。そして依然として残るテーマとして、身体不活動をなくす(減らす)にはどうしたら良いかが議論されておりました。

今回の ISPAH Congress は2020年10月にバンクーバーで開催されます。2年後には、身体活動と健康に関するどのような研究がトレンドになり、どのような知見が発表されるのか、今から楽しみです。



写真①：(左：筆者、右：田島先生(慶應義塾大学))



写真②：メイン会場の様子

私と運動疫学

九州大学 熊谷 秋三

我々が疫学研究を開始したのは2006年である。主に、高齢者を対象に4つのコホートを作成してきた。特徴として、活動量計による評価、認知機能評価などの測定項目の一貫性にある。高齢者に対象を絞った最大理由は、前向き研究の期間が短期間で済むことである。その間に、久山町研究では、握力と総・原因別死亡との関連、運動習慣と認知症発症との関連などを本学の岸本准教授が報告した。AMEDの認知症研究開発事業では、全国1万人の地域在住高齢者を対象とした大規模コホートが既に構築され、我々は身体活動・座位行動およびフレイル評価指標の策定を担当、久山町ではデータ収集を行った。篠栗町元気もん研究では、8

年間の前向き研究でフレイルと要介護認定との関連性を確認できた。また、多くの体力・運動機能および中・高強度活動長は要介護認定と関連するが、座位行動とは関連しないことも確認した。2017年度からは、糸島市フレイル研究 (IFS) に従事し、現在は9月よりプレフレイル保有者の地域運動介入や健康情報提供による介入をコホート全員 (966名) に実践している。IFSの最大の特徴は、運動介入のためのコホートの継続的蓄積 (10月よりスクリーニング事業開始) と要介護認定をアウトカムとした前向き研究の展開にある。そこでは、高齢者の体力・運動機能と身体活動・座位行動との関連の方向性や因果関係も検討できる。日本は世界でも

冠たる長寿国であるが、世界一座位時間が長い国民でもある。横断研究であるが、全座位時間は認知機能と負の関連があること、特に趣味や読書などの座位時間との間にも同様な成績が確認された。著者の仮説である「日本人の座位時間は健康不利益と関連しない」・「やや活発な活動や高い体力・運動機能は健康利益と関連する」の検証が急務と考えている。久山町研究における総・原因別死亡、認知症との関連に関する前向き研究の解析結果を楽しみにしている。



編集委員会特集企画

編集委員会委員長／筑波大学 中田 由夫

日本運動疫学会編集委員会では、投稿原稿を集める工夫のひとつとして、編集委員が3人1組となり、各組で特集企画を提案することとしました。全部で4グループあり、これまでに3つのテーマが提案されています。

企画1「スポーツ障害と競技パフォーマンスの疫学」

担当：笹井浩行・柴田愛・田中千晶

企画2「不活動に陥りやすい集団の運動疫学」

担当：岡田真平・小野玲・甲斐裕子

企画3「子どもを中心としたライフステージと運動疫学」

担当：安藤大輔・鎌田真光・原田和弘
それぞれの企画趣旨につきまして、すでに会員メーリングリストを通じて

周知させていただきましたが、学会ホームページにも掲載いたしましたので、見逃した方はこちらをご覧ください (<http://jaee.umin.jp/news181201.html>)。企画1～3につきましては、いずれも募集時期は2019年12月31日までで、運動疫学研究第21巻1号～第22巻1号に掲載される予定です。通常の査読付き論文と同様に査読するため、掲載を保障するものではありませんが、過去2年間の実績では採択率は9割程度となっています。

本誌の投稿から1st decisionまでの平均日数 (過去1年間) は14.5日 (範囲: 8～23日) です (2018年4月1日現在、査読付き論文に限る)。完全オープンアクセスであり、出版費用 (投稿

料や掲載料) は無料です。日本運動疫学会は日本学術会議協力学術研究団体に指定されており、本誌に掲載される論文は、多くの大学院で学位審査等の要件として認められます。また、本誌は2019年3月にJ-STAGEへの掲載が決定しており、掲載論文のアクセス機会の拡大が期待できます。J-STAGE掲載に伴い、国際的に広く普及している恒久識別子 digital object identifier (DOI) が、掲載論文に自動的に付与されます。そのため、掲載論文の追跡可能性も高くなります。

会員の皆様の積極的な投稿をお待ちしています。

「日本運動疫学会プロジェクト研究」を募集します (平成31年2月1日～4月30日)

プロジェクト研究委員会委員長／慶應義塾大学 小熊 祐子

「日本運動疫学会プロジェクト研究」とは、運動疫学分野の発展に寄与するとともに社会貢献度が高い研究プロジェクトとして本学会が認定することを指します。①新奇性・独創性が高い、②大きな成果が期待できる、③社会貢献度が高いなどの要件を満たす運動疫学に資する研究を総合的に判断して認定します。認定されることで、本学会が有するネットワークとの連結や情報共有などの面で、学会から支援

を受けられます。研究期間は3年以内ですが、更新も可能です。

研究代表者 (会員に限定) の方は、申請書をプロジェクト研究委員会 (jaee.project@gmail.com) に提出してください。申請書は学会HPよりダウンロードできます。学術総会で採択研究を公表します。

* 7月1日～10月30日も募集期間です。
* 研究アイデアの提案は随時受け付けています。

* 学会HP (<http://jaee.umin.jp/news161210.html>) も併せてご参照ください。

発行：日本運動疫学会
編集：日本運動疫学会 広報委員会
日本運動疫学会事務局
〒160-8402 東京都新宿区新宿 6-1-1
東京医科大学公衆衛生学分野
E-mail: jaee.info@gmail.com